

ご挨拶



竹 中 彌 生

駿河台大学を退職するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

1999年も終わりに近いある日、突然、片岡先生からお電話をいただき、駿河台大学で比較文明論と英語を教えないかとのお誘いを受けました。当時、私は慶応大学の文学部で任期付きの助教授として英語を教えておりました。まだ1年の任期が残っており、学生たちは可愛く、先生方もとても仲良くしてくださり、大変居心地の良い職場でしたが、新しく比較文明論という科目を教えさせていただけるのは魅力でした。

本来、私の専門は英文学ですが、その中でも演劇を専門にしております。演劇は思想の分野に分類されることも多く、文明論や文化研究の一端も担っています。英文学専攻の私を文明論の教授として誘ってくださったのも、それが理由だったと思われまふ。ことに、私のソルボンヌ大学での学位論文は『ジョン・アーデンの演劇に於ける神話と祭礼』という題で、ギリシャ・ローマの神話やヨーロッパのキリスト教文明以前の神話や祭礼を中心に据えて、それが現代の演劇にどのような影響を与えているかを研究したものです。当時の現代文化学部長の鈴木先生は、倫理学がご専門で、ギリシャ悲劇に造詣が深く、私の研究を評価して下さったようでした。私のような者が、比較文明論担当の教員として文科省の審査を通るか心配でしたが、神話を中心とした比較文明ということで行けば大丈夫というのが先生のご意見で、そのお見立てどおり文科省の審査を通り、採用が決まりました。

2000年4月に現代文化学部に着任し、ちょうど15年務めました。最初は比較文明論の他に演習、教養演習そして英語 I, II を担当し、その後、英語コミュニケーション演習、スタディースキルズ、比較文化研究法、海外語学演習、そして、最後の3年間は本来の専門であるイギリス文学も加わり、大変楽しく、やりがいのある教師生活を送らせていただきました。

やはり、一番印象に残っているのは専門の演劇を取り上げた教養演習やゼミですが、大変素直で、まじめな学生が多く、文学が専門の学生が出すのとは全く視点の違う意見が出され、改めて作品を見直したことも多々ありました。特に忘れられないのは『セールスマンの死』について、ある農家出身の女子学生の出した意見です。主人公ウィリー・ローマンは自殺をする前の晩、日の当たらない自宅の庭に種を蒔きます。この種は芽を出して育つであろうかというのはこの作品の最後の大きな問題なのですが、この学生ははっきりと「芽は出る」というのです。その理由はウィリーが蒔いた種はレタスと人参であり、農家育ちの彼女の実体験から、この二つの野菜は、あまり日照がなくても育つというのです。ウィリーが蒔く種に象徴的な意味があることは紛れもない事実なのですが、今までの解釈では、せっかくウィリーが蒔いても日照がないので、芽は出ないだろう、と彼の失敗の人生に重ね合わせるのが普通です。アーサー・ミラーがどこまで野菜について知っていたかは定かではありません。けれど、この学生の解釈でこの作品を見ると今までとは全く異なった結論が出て来るのです。『オイディプス王』についてもシェイクスピアの作品についても、普段、文学を専門にしている仲間たちと、ある種の先入観を持って議論する時とは全く異なる、一考に値する、素直な疑問から生じたユニークで面白い意見が多々出ました。

英語コミュニケーション演習も大変思い出多い授業です。この授業からは何人かの英語教員が育ってゆき、また、多くの学生が海外留学に出かけて行きました。受講生は、始めは日本人の学生がほとんどでしたが、英語を使って進行する授業形態のためか、ここ数年は留学生が増え、中国、ネパール、ウイグル、ウクライナ等様々な国の様々な人種の学生がそれぞれの価値観と文化的背景を持ち寄ってディスカッションをする中身は大変興味深いものがありました。

卒論指導も印象深い学生との接点です。心理コースの学生が手掛けた、『リア王』と『セールスマンの死』の父親像の比較や、心理学上の学術的な二重人格と映画や文学作品に現れる二重人格の比較など、現代文化学部ならではの大変面白い、優れた卒論がありました。「人魚」について卒論を書いた学生が、最後に、三年生に残す言葉として、卒論を書くことがどれほど楽しいことか、その楽しみを経験するために、早くから取り掛かるようにと一生懸命、説いていたのは大変うれしいことでした。

本学には大変優れた留学制度があり、多くの学生が留学をし、大きく飛躍しています。そのような学生が、卒業後何年も経っても未だ、留学ができて本当によかつ

た、と言ってくれるとき、留学のお手伝いをした者としては、この上ない喜びですが、最近、留学希望者が極めて少なくなっていることは大変残念なことです。私自身、駿河台大学の在外研究制度のおかげで、一年間ロンドンに留学し、研究を深めることができました。せっかくのこの大学の留学制度が活かされるように、学生たちが、もっと国外に目を向け、幅の広い人間となることを目指してくれることを願ってやみません。

学生との思い出は尽きませんが、二度に亘って所長を務めさせていただいた教養文化研究所のおかげで多くの楽しみと経験をさせていただきました。講師にお願いした劇作家、平田オリザ氏、地震学の権威、島崎邦彦先生、毒まむし三太夫氏、その他の多くのその道の専門の方々と親しくお話をする機会を得ることができました。また、鈴木伸一先生、岡田安芸子先生、福田二郎先生、ポール・マッカーシー先生と一緒にさせて頂いた共同研究では、大変、勉強させていただいた上にとっても楽しい時間を過ごさせていただき、良い思い出ができました。

教養文化研究所所長の他に、最後近くの二年間の英語部会長の仕事も、諸先生方のご協力とご支援で、何とか無事務めさせていただきました。心より感謝しております。15年間に渡り、多くの皆様から頂戴したご厚情に対し、心よりお礼申し上げます。

最後に、駿河台大学と、関係者皆様の増々のご発展とご活躍を心よりお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。